

2011 年度 京都外国語大学大学院講演会

「英語学研究の英語教育 への三つの貢献」

講師：岡田伸夫氏（大阪大学大学院教授）

＜講師プロフィール＞

経歴：1971 年東京教育大学文学部卒業。1973 年東京教育大学大学院修士課程修了。1975 年東京教育大学大学院博士課程を退学し、京都教育大学教育学部に専任講師として着任。1989 年京都教育大学教授。2001 年大阪大学言語文化部に着任。2005 年大阪大学大学院言語文化研究科に配置換え。現在に至る。

著書：『英語教育と英文法の接点』（美誠社）、共著に『言語科学と関連領域』（岩波書店）、共編著に『大学英語教育学』（大修館書店）、『英語研究と英語教育』（大修館書店）などがある。

大学英語教育学会(JACET)副会長。日本英語学会理事。

日時：6 月 28 日（火）16:40～18:10

場所：171 教室＜1 号館＞

（講演概要は裏面をご覧ください）

講演後は講師を囲んでの懇親会も企画しています。多数のご参加を期待しています。

ご質問等は右記まで 杉本義美：y_sugimoto@kufs.ac.jp

<講演概要>

英語学者には大学で専門の英語学を講義している人と共通教育の英語を担当している人がいますが、英語学の授業より英語の授業により多くかかわっていても、本籍が英語学研究であると意識している人は、自分の英語学の研究成果を英語教育に応用することに対しては必ずしも積極的ではありません。

英語教育には英語とその教育という二面がありますが、狭い意味の英語教育の専門家、あるいは、英語教育実践者は、学習英文法の中身が全面的に正しいという前提に立っています。学習英文法の中身が正しいか正しくないか、適切か適切でないかを自分で経験的にいちいち検証しなければならないとは考えません。生徒や学生の英語力、文型や文法事項の説明の仕方、教授技術など、ほかに考えなければならないことがいっぱいあるからです。

問題は、現在使われている学習英文法の内容が、文法事実に関して、あるいは、文法現象の説明の仕方に関して、全面的に信頼するに値するかどうかです。伝統的な学習文法は先人の努力の賜物です。その英語教育への貢献度を過小評価してはなりません。また、伝統的な学習文法にまるごと取って代わる新しい学習文法が用意されているわけでもありません。しかし、近年の英文法研究により、数多くの新事実が発掘され、また、ばらばらの事実を統括する見通しのよい説明法が提案されていることは確かです。高校で学習する英文法の内容が英文法すごろくの上がりではないのです。これからの英語学者に期待されることの一つは、英語学研究の中で発掘された事実や、一見したところ無関係に見える複数の事実を統一的に説明できる原則を、生徒や学生の理解度に配慮し、工夫を凝らした上で、提供することです。これが英語学研究の英語教育への第一の貢献です。

英文法研究の英語教育への第二の貢献は、英文法の正しい教え方を示すことです。現行の文法指導法の欠点の一つは、表面的な形にこだわり、意味を軽視、極端な場合には無視しているということです。意味を軽視する文法指導法の最たるものは二つの構文の機械的な書き換えですが、文法が意味と形のカップリングであるという原点に立つと、「意味のない」指導法は不完全であると言わざるを得ません。

学習指導要領の冒頭に外国語教育の目標が書かれています。最初に上がっているのは、「言語や文化に対する理解を深める」です。英文法研究の英語教育に対する第三の貢献の仕方は、英文法研究の成果を活かして、学生が言語や文化に対する理解を深めることを支援することです。日本語と英語の文法には異なる点が多々あります。日本人学習者が英語学習に苦勞する理由の一つはまさにそこなのですが、母語と異なる言語を学ぶことのメリットを意識したほうが良いと思います。

言葉には人を救ったり、励ましたり、幸福にしたり、人に自尊感情や生きる勇気を与えたりするポジティブな力があります。その反面、人をいじめたり、不幸のどん底に陥れたり、極端な場合には死に追いやったりするネガティブな力もあります。言葉が人の生殺与奪の権を握っていると言っても過言ではありません。言葉を観察し、省察する力を育成することが、もっと踏み込んで言うと、自分と異なるものの見方や考え方によさを見つける心を育てることが、外国語教育の重要な目的であると言ってよいと思います。コミュニケーション能力の育成を視野に入れない英語教育はあってはならないと思いますが、英語をコミュニケーションの道具としてのみ捉える英語教育もあってはならないと思います。